



延長された高齢期の発達課題と道徳的課題

道徳科学研究センター生命環境研究室 客員教授

小山 高正



いつの間にか、人生百年時代といわれるようになりました。平均寿命は男女ともにまだ八十歳代ですが、百歳以上の高齢者は七万一千人あまり(二〇一九年現在)いらつしやいます。ちなみに、前の東京オリンピックがあった一九六四年では数百人レベルと聞いていますから、五十五年を経ているとはいえ大きな変化で、人生百年時代も過言とは言えないかもしれません。

すると言います。改訂『テキストモラロジー概論』でも、ハヴィガースト、エリクソン、ボウルビイの発達理論をもとに、「人生の時期と品性の向上」として発達課題を扱っています。乳幼児期、児童期、青年期、成人期、高齢期の五段階がそれぞれです。

一方、エリクソンは乳幼児期を三段階に、成人期を二段階に分けて全八段階として示しました。そのエリクソンも九十歳を超えてから、超高齢期では「身体機能の低下や社会的ネットワークの縮小が大きな心理的危機をもたらす」と考えて、心理的発達の第九の段階が必要と考えました。その段階にめざす課題の一つに老年的超越があります。

老年的超越という概念を提案したラーシュ・トーンスタムはスウェーデンの社会老年学者で、禅やユングの考え方に刺激されたと言っています。彼は老年的超越の内容を以下の次元で説明しています。

- ① 宇宙的意識の次元
(思考の中に時間や空間の壁がなくなり、意識が自由に過去や未来と行き来するようになる)
- ② 自己に関する次元
(自己中心性や自尊心が良い意味で低下し、自己を超越して利他的になる)
- ③ 社会と個人の関係の次元
(他者との関係の中で自分をよく見せようとする態度が減少し、物事の本質が分かるようになる)

の三つです(権藤恭之、二〇一六年)。

前述の『モラロジー概論』の高齢期の目標と重なるところが見られます。三十年ほど延長されたといえる高齢期を前期(概ね六十五〜七十四歳)、後期(概ね七十五〜八十四歳)と超高齢期(概ね八十五歳以上の三つの時期に分け、その発達課題と道徳的課題について考えていきます)。

一方、高齢期は体力の減退、種々の病気、さらに認知症などのネガティブな要素が少なくありません。高齢者の生活の質を落とすことなく、その幸福感をいかに高められるかについて、老年的超越という一つの目標を見据えながら研究をしたいと思っています。